

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730169

研究課題名（和文）戦前日本におけるマルクス主義文献の大衆的普及の様相

研究課題名（英文）A Study on the Spread of Marxian Literatures in Japan before World War II

研究代表者

久保 誠二郎（KUBO SEIJIRO）

東北大学・大学院経済学研究科・博士研究員

研究者番号：80400216

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は次の通りである。

（1）戦前におけるマルクス主義文献の学習案内の探索：7 点の学習案内から、マルクス主義普及における問題意識を析出した。

（2）国立国会図書館のマルクス主義文献のデータベースの作成：NDL-OPAC マルクス主義文献 575 点、NDL-OPAC レーニン文献 241 点の書誌情報を収集した。

（3）雑誌『我等』及び『東京朝日新聞』にてマルクス主義文献の出版広告の調査：『我等』792 点と『東京朝日新聞』277 点の広告を抽出し検討を加えた。

研究成果の概要（英文）：(1) 7 study guides on Marxism were investigated. (2) Searching the NDL collection, 575 Marxian books and 241 Leninism books were found. (3) Searching advertisements for Marxian books in *Warewa* and *Tokyo Asahi Shinbun*, 1069 materials were investigated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：マルクス主義、レーニン、大衆、普及史、受容史、戦前日本、大正・昭和初期、文献史

## 1. 研究開始当初の背景

筆者は、戦前の大原社会問題研究所が作成し、わが国で刊行されたマルクス主義文献を最大級の規模で収録する文献目録『日本マルクス主義文献』（1929 年）の調査と翻刻版作成にあたる中で、戦前のマルクス主義文献の膨大さを確認するとともに、マルクス主義の大衆的普及を目的とする文献が相当数あることを認識した。こうした文献はほとんど研

究対象とされてこなかったものである。しかし、これらマルクス主義の啓蒙書、解説書は、戦前の我が国のマルクス主義の大衆的普及における重要な資料であると捉え、ここに焦点をあてた普及史研究が必要であるとの着想に至った。

## 2. 研究の目的

（1）マルクス主義の学習手引き、（2）平

易な解説書、(3) マルクス主義文献の出版広告に着目し、それらを探索し、内容と動向を探り、戦前におけるマルクス主義文献の大衆的普及の様相を明らかにする

### 3. 研究の方法

(1) 「何を読むべきか」といった学習案内の探索を目的とする。このために国立国会図書館NDL-OPACやNACSIS Webcat、雑誌記事索引集成データベース(皓星社)、『日本社会運動史料』(大原社会問題研究所)の各種機関誌・雑誌の復刻版の目次を利用する。

(2) 啓蒙書の探索には、書名から容易に判断がつくものとそうでないものがあること、またそもそも戦前のマルクス主義文献を網羅的に収録する文献目録は筆者の知る限り存在しないため、まず可能な限りマルクス主義文献の書誌情報を収集することに取り組む。そこから当時の啓蒙書の割り出しを進める。

(3) 当初の計画では多くのマルクス主義文献が掲載された『我等』等の雑誌広告のみを対象としたが、近年、新聞の紙面データベースの利用が可能になったことから、新聞広告をも対象に加えることにした。

### 4. 研究成果

(以下、旧字体は新字体に改めた)

#### (1) マルクス主義文献の学習案内の探索

次の学習案内というべき文献を見出した。

『何を読むべきか No. 1』(久留弘三、労働文化協会出版部、192?) [記載なし]

『何を読むべきか 上・下』(関根悦郎、『無産階級』(建設者同盟)、1926年2月、4月号)

『何を読むべきか 社会問題文献目録』(社会問題研究会、1927)

『何を読むべきか 社会科学文献目録 大正時代の部』(ソシウス社、1928)

『労働者教育大綱』(永田幸之助、『マルクス主義』1929年3月号)

『何から読むべきか 社会科学研究法』(無産社編集部編、無産社、1930)

『マルクス・レーニン主義手引』(日本プロレタリア文化連盟、1933)

(以上の他に、文献目録・解題、学習案内として「社会問題文献解題」『社会問題講座1-12』(大宅壮一編、1926)、「我等何を読むべきか」(『マルクス主義講座』、政治批判社編、上野書店、1927-1928)、「レーニン重要著作解題」(同上、8-9巻)『邦訳マルクス・エンゲルス文献』(内藤赳夫、大原社会問題研究所、1929)、『日本社会主義文献 第一輯』(大原社会問題研究所編、1929)、『日本社会主義文献解説』(細川嘉六、1932)があるがここでは取り上げない。)

これらの学習案内は、労働者教育のための

学習案内である。ただし、それぞれ意図や運動との関連での違いや濃淡がある。

久留『何を読むべきか』は神戸労働学校に關係するパンフレットである。ユニークなのは労働者教育の教科書に何がふさわしいかを「知名の士に選んでもらって」(6頁)推薦文と共に紹介する点にある。二つ記しておく。「櫛田民蔵 一、無産階級の過去現在及未来(エンゲルス) 一、賃労働と資本(マルクス、河上肇訳) 一、労賃価格及利潤(同上) この順序にて教科書として御使用被成候事は如何。愚見まで。」(14頁)

「山本宣治 取りあへず手に入り易い、安い、わかり易いもの大抵この順によんでほしい。一、山川均著『タンクの水』十銭 二、野田津太著『労働者の明日』十銭 三、住谷悦治著『プロレタリアの使命』十銭 四、山川均著『資本主義のカラクリ』三十銭 安いから薄いからとバカにするのは、ブル学生のかない根性ゆえ、繰返し——自分の境遇に引き比べ、考へて読むべし」(18頁)

関根『何を読むべきか』は労働者の「解放戦の武器たる知識」をいかに習得すべきかを教程として示したものである。1926年の発表当時の状況を関根は次のように言う。労働者教育の目的を以て発行されたパンフレット類は百を越えるが、「然しそれらは、その時々により、漫然と発行されたものが多く、無産階級の知識的進路、或は階梯を追って、一定の方針の下に発行されたものではない。従ってそれは、秩序なく、方針なく、混然、漫然と入り乱れて、労働者、農民は、そのどれを取るべきかに迷はされることが少なくない」。そのために、それらを大体の階梯に応じて排列し「何を如何に読むべきを示すことも、必要」だとする(2月号18頁)。

マルクス主義文献が氾濫していくなかで、それらを整理する必要を認めたこの指摘は、マルクス主義文献の大衆的な普及が一つの段階を迎えたことを示している。

社会問題研究会編『何を読むべきか』は「プロレタリアカルトの見地から編纂」したとあり、著作者別に約500点排列したものである。解説を付さない文献目録となっている。

ソシウス社『何を読むべきか』は上掲社会問題研究会編『何を読むべきか』を出版社を変えて刊行されたものと思われる。

永田『労働者教育大綱』は明確にマルクス・レーニン主義による労働者教育を謳い、指導者を養成するための広範な学習の諸課題を掲げた教程を示している。また、従来の労働学校・労働者教育が衰退した原因のひとつとして「闘争と結合されてなかった」点をあげ、運動との密接な関連のもとでの教育を強調している。

無産社『何から読むべきか』は、労働者の運動との関連を強く意識した学習案内であ

る。「階級闘争が尖锐化すればする程我々は精鋭な武器を持たねばならぬ。それは言ふ迄もなくマルキシズムであり、レーニズムである…一日も早くプロレタリアの理論を把握せられ、確固たる無産階級解放運動の戦士たられんことを望む」(序)。また、これまでのマルクス主義文献の隆盛を次のように規定し、本書の目的を示す。「…今日迄の左翼出版物の刊行はコンマーシャリズムとコンミニズムの狂奏曲であり混合であった…本書を偏〔編〕むに至ったものは実にこの唾棄すべき現象への対抗であり対策である」(同)。

1926年の関根(上掲)がマルクス主義文献の氾濫を「混然」「漫然」と捉えたのに対して、1930年のこの学習案内は「コンマーシャリズムとコンミニズムの狂奏曲であり混合」と捉えていることに大きな差がある。確かにマルクス主義文献の刊行が広がるにつれ、商業主義が入り込む余地はあるだろう。しかしこの捉え方の差はそれだけではなく、マルクス主義の運動の進展とともに、いわゆるレーニン主義の受容も進み、それを正統とする立場が前面に押し出されてくるといった状況の変化も関係しているのかもしれない。

『マルクス・レーニン主義手引き』は、マルクス・レーニン主義の立場から労働者の運動との関連を強く意識した学習案内である。「マルクスの偉大な革命的理論と実践とは、レーニンによって発展され、スターリンによって正しくうけつがれ、今日ほど世界のプロレタリアート解放の必須な武器とされていることはない」(緒言)。マルクス主義、レーニン主義の平易な解説とともに読書案内ともなっている。

見てきたように、これらの学習案内から当時のマルクス主義文献の大衆的普及の様相や段階を知ることができる。

ただし、これら学習案内の探索については、予想より順調にはいかず、数が少ない結果となった。未調査にとどまった機関誌類などを対象にして、さらに探索していく必要がある。

## (2) 戦前のマルクス主義文献の網羅的探索・データベース化と啓蒙書の探索

筆者は戦前の大原社会問題研究所(内藤赳夫)が作成した未刊行資料『日本マルクス主義文献』(1929年)の翻刻を他の研究者と共に進め(本研究課題とは別の科研費基盤研究(C)21530185、研究分担者)、1919-1927年のマルクス主義文献909点の書誌情報のデータベース化を進めた。本研究では、さらに範囲を広げ、拡充を進めることを目指した。当初計画では既存の文献目録のデータベース化を考えたが、近年のデジタル・データベースの進展は目覚ましいものがあり、研究目的により適したものと考えられるため、下記の

国立国会図書館のデータベースを利用することとした。

文献検索に利用できるデータベースは国立国会図書館 NDL-OPAC の他にも国立情報学研究所 Nacsis Webcat があるが、後者は検索に独特の難しさがあったため(2012年度から CiNii Books に移行し検索が充実した)、前者を利用した。マルクスとレーニンをキーワード検索にかけ、結果を修正、補足し書誌情報をデータベース化した(両者には重複がある)。こうして、戦前のマルクス主義文献として以下のデータベースを持つに至った。

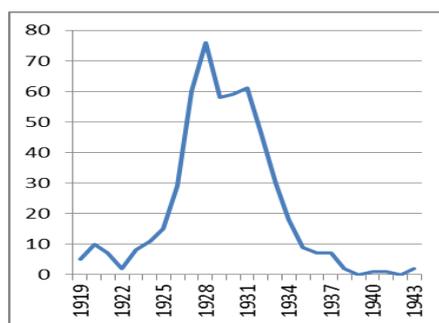
(『日本マルクス主義文献』翻刻版:909点)

NDL-OPAC マルクス主義文献:575点

NDL-OPAC レーニン文献:241点

これら3つのデータベースには重複があるため、単純に合計はできないものの、1000点はゆうに越える規模となった(このデータには、反マルクス主義文献のほか、マルクスが主題ではなく付随的な文献も含まれている。また書誌情報に不備があるものも含まれている)。

NDL-OPAC マルクス主義文献(刊行年に不備がないもの)を刊行年別の点数でグラフ化すると次のようになる。



従来の研究では、戦前のマルクス主義の隆盛にはよく言及されるが、どのような文献が刊行されたのかの全体像は不明である。作成したデータベースはこの欠落を埋めることが期待される。これらのデータベースは、当該分野における最大級の規模をもつと考えるが、CiNii Books 及び雑誌記事索引集成(皓星社)のデータを取り入れていない等、いまだ不十分な段階にある。

## 啓蒙書の探索

作成したデータベースから啓蒙書(一般書、入門書、解説書)を探索した。これはタイトルや刊行形態(叢書、文庫など)から判断し、かなり広めにピックアップした。NDL-OPAC データから約450点、『日本マルクス主義文献』翻刻版から約70点である。相当な点数になっているのは、大衆的普及という観点から考えたとき、研究当初に抱いた啓蒙書、入門書という枠だけでは大衆的普及の様相を捉えきれないと認識したからである。入門書では

なくても、例えば岩波文庫に『資本論』があれば、それはやはり戦前におけるマルクス主義文献の大衆的普及の役割を担ったと考えるべきであろう。

そこで、マルクス主義文献を文庫等の刊行形態を含めて検討するために多くの文献をピックアップした。ただし、マルクスの学説の普及には、やはり解説書・入門書の意味は大きいので、それは独自に対象とする必要がある。

ピックアップした文献から、年代的变化を見出すことができた。1927年頃からタイトルに「教科書」と冠したり、1931年頃から「教程」と冠した文献が現れることがそれである。『マルクス学教科書』シリーズ（マルクス書房）、『マルクス主義労働者教程』（叢文閣、希望閣）シリーズ、『マルクス主義政治教程』（白揚社）シリーズ、『マルクス主義経済学教程』シリーズ（白揚社）、単行本では『マルクス主義経済学初歩教程 誰にも判る経済学』（南蛮書房、1931）、『史的唯物論の理論 マルクス主義社会学の通俗教科書』（白揚社、1927）である。

前項で学習案内を取り上げたが、そこでは氾濫するマルクス主義文献を整理する必要、また運動との連携を重視する主張、更には商業主義との融合への非難があった。こうした運動的立場からの要望に応えるものとして、これらの文献が刊行されていくのではないだろうか。

### （3）雑誌『我等』及び『東京朝日新聞』の出版広告の調査

広告調査には独自の意義があると考えられる。ひとつには、そのマルクス主義文献の何を訴

掲載年別	点数
1919	6
1920	12
1921	45
1922	19
1923	32
1924	26
1925	66
1926	85
1927	246
1928	161
1929	85
(1930)	(9)
合計	792

求点として普及・販売しようとしたのかを広告文から読み取れる点である。出版する側は購買層を念頭に置き、また社会の雰囲気を感じ取っているであろうし、それは広告文に反映されていよう。ふたつには、そのマルクス主義文献の普及の程度・売行きを、広告から推測できることである。そもそも文献の発行部数を特定することは難しい（内務省資料が役立つようだが本研究ではそこまでは至らなかった）。部数を特定できるわけではないが、広告に記された「再版出来」「三版出来」といった版（現在の刷の意味）の情報は、今その書籍が売れていることを示すものとして広告によ

く登場する。この情報から売行きをある程度推測することができる。

さて、雑誌『我等』の広告収集では、文献タイトルまたは著者から判断し、マルクス主義に限らず社会主義的なもの、反マルクス主義の文献、また政治・社会運動の文献等を含めて計上している。なお、数十にのぼる文献を一覧で広告している場合（岩波文庫等）は除き、後継誌『批判』は対象としない。ここで計上しているのは広告された文献の数であり、相当の重複を含んでいる。

表から分るように、創刊の翌年から増減を経ながら漸増し、1927年に至って飛躍的に三桁台まで増加の後、1929年には前年より半減する。（『我等』の刊行は1930年3月号までなので1930年の点数は参考値）後半の非常にダイナミックな変動は、普通選挙を目前とする中での労働者の運動の高揚、そして総選挙実施と直後の3.15大弾圧（1928年）という流れを反映しているのだろう。

### 広告数の多い文献

これらの広告のなかで10回以上にわたり登場する文献は次のようである。

カウツキー『マルクス・エンゲルス評伝』（榎田民蔵、大内兵衛訳、我等社、1926）\*

マルクス・エンゲルス『独仏年誌鈔』（嘉治隆一訳、我等社、1927）\*

ローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』（益田豊彦、高山洋吉訳、同人社、1927）、『資本蓄積再論』（宗道太訳、同人社、1926）さらに『ローザ・ルクセンブルグの手紙と其生涯』（井口孝親訳、同人社、1925）

ブハーリン『史的唯物論』（檜崎輝訳、同人社、1927）及び『帝国主義と資本の蓄積』（友岡久雄訳、同人社、1927）

ゾムバルト『社会主義及び社会運動』（林要訳、同人社、1925（1928））

ボルハルト編『通俗資本論』（水谷長三郎訳、同人社1924（1927））

『資本と賃労働-『資本』著者の資本論略解』（モスト、嘉治隆一訳、我等社、未刊）\*

『土地公有論』（トマス・スペンス、森戸辰男訳、未刊）\*

（刊行年の（）内は普及版、末尾に\*を付したものは『我等叢書』。我等社刊行のものは同人社による発売、広告である）

『我等』の広告は同人社が突出して多い（510点）ため、我等叢書（我等社、同人社発売・広告）に含まれる文献の登場回数が多くなるのは当然だろう。それ以外で見れば、ローザ・ルクセンブルグのものが多く宣伝されていることが目を引く。ブハーリンのものはよく普及したようである。カウツキー『マルクス・エンゲルス評伝』やボルハルト編『通俗資本論』は啓蒙（入門）書としての位置づ

けがあろう。入門書と言えば、上掲ヨハン・モスト（マルクス閔）『資本と賃労働-『資本』著者の資本論略解』はユニークな文献だが、所蔵機関を見つけられず、未刊と判断した。上掲『土地公有論』も同様である。これらは広告（いずれも『我等叢書』）には刊行予告として記載されている。

運動面での文献では、産業労働調査所編『無産者政治必携』（同人社、1926（1928年改訂版））並びに『無産者法律必携』（同人社、1927（1929年改訂版））の広告回数が多い。

#### 広告中に記された「版」

ボルハルト編『通俗資本論』では、1927年刊行（廉価普及版）後、すぐに3版と広告され、翌々1929年の広告では6版とされている。ゾムバルト『社会主義及び社会運動』（林要訳、普及版）は、1928年刊行、翌1929年には6版と広告された。これらは好評であったようだ。河上肇『人口問題批判』（1927年、叢文閣）は1927年刊行、早くも同年の広告で6版とある。河上の人気が伺えよう。産業労働調査所編『無産者政治必携』（1926年）は1929年において9版と広告された。これも普及の程度は良好であったようだ。いずれも部数が不明であるが、これらは比較的普及した文献と考えてよいのではないだろうか。

別格と思われるのが次の文献である。ブハーリン『史的唯物論』（1927年、檜崎輝訳、同人社（廉価）普及版）は、1927年刊行であり、2年後の1929年広告には何と26版と記されている。ブハーリンの文献はやはり相当な勢いで普及したと見てよいだろう。もうひとつ別格と見られるのがカウツキー『改訳資本論解説』（高島素之訳、1927年、改造社）である。この『改訳 資本論解説』は1927年の刊行であるが、その年内の広告に驚くべきことに「忽六十版」（『我等』9巻10号）とある。にわかには信じがたい数字であるが、事実なら空前の売行きであったことになる。もともと高島訳『資本論解説』は1919年に売文社から刊行され、その後もいくつかの出版社から刊行を続けており、戦前の『資本論』理解と普及において大きな役割を演じたことは間違いないだろうと筆者は考えている。ただし、現時点ではこの60版については更に調査を要するものとしておきたい。

広告文（[] は引用者の修正）以下紹介する。

#### 1919年1巻6号掲載『マルクス資本論解説』

（カウツキー、高島素之訳、売文社出版部）

「…社会主義を陥れんとする者は先づ『資本論』の堅城を崩さなければならぬ。社会主義を守らんとする者は先づ『資本論』の鉄壁に籠るが安全である…」

#### 1921年3巻7号掲載『レーニンとトロツキー』

（山川均、改造社）

「『怪物は全欧羅巴を悩ましてある—共産主義の怪物！』。之はマルクスの有名な共産党宣言の一句である。…レーニンとトロツキー…彼らは怪物であるか、狂人であるか…それとも前代未聞の空想家であるか。」

#### 1923年5巻1号掲載『社会革命史論』（赤松克磨、大鏡閣）

「従来一切の歴史は階級闘争の歴史である」共産党宣言の冒頭に掲げたマルクスのこの一語は実に千古不滅の真理である。…正しき生命に生きんとする者は先づ真の歴史を知って未来の推移を洞察せねばならぬ。」

#### 1924年6巻10号掲載『経済科学十二講』（ボグダーノフ、赤松克磨訳、白楊社）

「経済学は…どうも従来のやうな説き方では興味が起きないし亦我々の日常生活にシツクリ当て嵌らぬ。本原著はロシアのソビエツト政府が労働者の教科書として編纂しただけあって…実生活にピッタリと合ひ…今や本書は世界の労働者の教科書とならんとしつつある」

#### 1925年7巻7号掲載『ローザ・ルクセンブルグの手紙と其生涯』（井口孝親訳、同人社）

「…ドイツ革命の犠牲となった女性革命家ローザ・ルクセンブルグの嵐のやうな生涯の裏には、薔薇の花の[ど]れよりも床かしい女性的の薫りが流れてみた。戦士としてのローザの男らしい行動は、生々しい革命の歴史を残したが、女性としてのローザは、その濃やかな女らしい情緒を、彼女の僅かばかりの手紙にとゞめた。それがこの書である」

#### 1926年8巻4号掲載『経済学入門』（ローザ・ルクセンブルグ、佐野文夫訳、叢文閣）

「本書はローザ・ルクセンブルグが労働学校に於て試みた経済学の講義を生前自ら纏めたもので、彼女の一生を特色づけた能動的変革的態度が全巻を一貫してある。従って『資本論』の寄木細工式「抜粹」と骨抜きの「祖述」を事とする在来の解説書とは全然その選を異にしてある」

#### 1927年9巻2号掲載『資本論解説』（カウツキー、高島素之訳、改造社）

「今日マルクスを知らずして、社会問題を論ずるものあらば愚の極だ。…本書の如き完全なる解説書は何時の時代までも大いなる、その役割を演じ得るものと断言し得る…」

#### 1927年9巻8号掲載『資本論』（マルクス、高島素之訳、改造社）

「翻訳の改訂・廉価版の発行により資本論初めて民衆に解放さる！/マルクスの資本論は有史以来人類の科学的努力が産出した最大労作の一つである…」

#### 1927年9巻9号掲載『資本論』（マルクス、河上肇、宮川実訳、岩波文庫版）

「…予約を以て民衆を緊縛せず飽くまで解放の真精神を体現する小分冊自由分売の徹底的普及版」

1927年9巻9号掲載『通俗資本論』（ボルハルト、水谷長三郎訳、同人社）

「マルクスの資本論が我等の常識となる日が来た！…『資本論』全訳の廉価版が出てはまだ吾等の上には大衆化してゐない。…僅かの時間と努力にしかも僅か一円の値段とで資本論が始めて吾等の常識となる日が来たのだ」

1927年9巻10号掲載『資本蓄積論』（ローザ・ルクセンブルグ、益田豊彦、高山洋吉訳、同人社）

「ローザ・ルクセンブルグ！数ある革命家の中で、彼女の名ほど吾々に親しみ深きはない。…本書は…彼女の血と熱との結晶である。…人類の歴史が再び血塗られんとする秋、本書は読者を鼓舞して反帝国主義への闘争に発足せしめずにはおかないであらう」

広告文からは、社会問題に應えるものとしてのマルクス主義の意義が打ち出され、また学術的価値を称揚して読者に訴えかけている。これは当時の人々の関心の所在と密接に関連しているものといえよう。さらには『資本論』理解への強い要求とそれに応えようとする出版側の動向、競争戦をも見出せる。禁書の代表格である『共産党宣言』の一節が広告文に現れているのも興味深い。最後のローザの『資本蓄積論』の広告文は政治的メッセージを書籍広告に託したものとなっている。

東京朝日新聞では「聞蔵 II」を利用し、「マルクス」検索で広告を抽出した。広告された文献点数（反マルクス文献も含む、全集は1点とした）は次の表のとおりである。これには漏れている文献があると思われるため、点数は暫定としたい。

掲載年	点数
1919	23
1920	32
1921	44
1922	20
1923	11
1924	10
1925	16
1926	79
1927	9
1928	22
1929	0
1930	2

『マルクス主義講座』（上野書店）の広告を紹介する。

1927. 10. 30 付

「深刻なる社会的圧迫と底知れぬ生活破綻!! 如何にして此の不安より離脱すべきか？」

1927. 11. 11 付

「真に民衆の力となり、輝かしい導きの星となるもの、それは唯マルクス主義講座あるのみ」

（４）まとめと今後の課題

- ① 労働者のマルクス主義学習は、氾濫するマルクス主義文献の整理、運動との連携強化、商業主義との融合への非難といった批判（学習案内）を経て（あるいは批判と共に）、『教科書』や『教程』と冠した旧ソ連を中心とする文献が現れてくる

流れが見えること

- ② マルクス主義文献の大衆的普及を捉えるには、対象を単に入門書に限定する観点ではなく、文庫や叢書、廉価版といった刊行形態をも勘案すべきこと、さらには観点そのものを押し進め、学術面からの普及（教養化）と運動面からの普及（大衆化）という二つの道ないし性格からマルクス主義の人々への普及を捉えるのが妥当に思われること
- ③ 広告は、その文献のもつ時代的な訴求点を示し、当時の受容の在り様をリアルに伝える格好の資料であること、また普及度合いの推測に役立つこと

以上はまだ仮説的な段階にとどまる。データベースの拡充を図り、学習案内をさらに探索し、新聞調査と文献の内容調査に進むことが今後の課題である。

参考文献

梅田俊英『社会運動と出版文化』（お茶の水書房、1998）、吉見俊哉・土屋礼子編『大衆文化とメディア』（ミネルヴァ書房、2010）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

①久保誠二郎、「『日本マルクス主義文献』と大正・昭和初期のマルクス・ブーム」、経済学史学会全国大会、2011年11月6日 京都大学

〔その他〕

ホームページ等

[www.ric.hi-ho.ne.jp/jlme/](http://www.ric.hi-ho.ne.jp/jlme/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 誠二郎 (KUBO SEIJIRO)

東北大学・大学院経済学研究科・博士研究員

研究者番号：80400216

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：